

まえがき

本書は、学校法人河合塾の付属機関である河合文化教育研究所の研究プロジェクトのひとつ「内藤湖南研究」の成果である。今から四年前、私は山田伸吾氏と共に、「内藤湖南研究会」を発足させた。私たちのよびかけで有志の中国史研究者が協力参加してくれることになり、湖南の著作の会読が始まった。以来今日までの経過については、山田氏の手になる「あとがき」に述べられる予定なので、詳細はそちらにゆずりたい。

ところで、いまなぜ内藤湖南なのか。研究会の参加者はいずれもかねてから湖南の学問と思想に深い敬意を抱いてきた者ばかりであるが、会への参加の動機は必ずしも一律ではないであろう。ただ、湖南の中に、今日私たちを取り巻いている思想傾向とは質を異にする観点や方法を感じ取り、その世界にさらに深く触れたいという思いでは、共通するものがあるように感じられる。

本書の冒頭にかかげる「序説」では、このことをやや客観化して述べておいた。ここでさらに補足しておくならば、戦後五十年、中国史研究の分野では、さまざまな学問上の試みがなされ、少なからぬ成果を収めたにもかかわらず、中国史を総体としてとらえる有効な原理に到達することができないままに、次の世紀を迎えようとしているのである。それを自覚するとき、わが国における中国史研究の最も傑出した先駆者内藤湖南へ回帰するところが発想されるのは、理の当然といわなければならない。まことに、山中で道に迷った者は、もと来た方へ戻らなければならない、のである。

「序説」では、湖南に回帰すべきことを述べたほか、その簡単な伝記とおよその思想構造を記して、各論を理解するための便宜とした。内藤湖南について、その名は知っていてもまだ多くの知識を持ち合わせていない若い読者のことを考慮したためである。

各論の部分は十一篇の論考から成るが、以下その論旨について簡単に紹介し、研究会が全体として何を問題にしてきたかを明らかにしておきたい。なお行文の都合で、紹介の順序は配列順と異なるところがあることを、あらかじめお断りしておく。

さて、明治維新後の約三十年間、近代国家形成の熱気を帯びた時期に、湖南はその青年時代を送った。それは、彼にとつても思想形成の時代であった。小野泰「内藤湖南と同時代——日本の天職論をめぐって」は、同時代のオピニオン・リーダーたちのアジア認識およびそこからする「日本の天職」論との比較において、湖南のその特質を摘出したものである。すなわち福沢諭吉らの、西洋的新文明と東洋的旧文明の衝突という脱亜論的主張に對して、湖南は、日本のイニシアティブによって東西文明の対立を止揚した坤輿文明（世界文化）の創建を提唱する。その際、中国の歴史・文化の発展性を認めていたという。小野論文が湖南の初期思想の特色として挙げた、(1)世界文化の建設、(2)日本の指導性、(3)中国文化の発展性、の三点は、湖南の生涯をつらぬく思想のライト

モチーフでもあった。このことは、「序説」の中でも指摘している。

右の思想構造からすれば、湖南にとって中国問題は日本の問題であり、それはまた世界文化の未来の問題であった。彼が辛亥革命を目のあたりにして『支那論』をはじめ多くの中国論を発表したのも、この思想課題に迫られたためであった。ところで、湖南は辛亥革命という事件をどう見たのであろうか。山田伸吾「内藤湖南と辛亥革命——もう一つの近代」は、事件当時の各新聞の論調が、辛亥革命を後進国中国が欧米・日本の先進国に追いつくための必然の過程ととらえたのに対し、湖南は、そのような西欧型近代革命としてではなく、中国が自ら経過してきた「近代」史の必然的過程として見ていた。これは、西欧型の「近代」に対するもう一つの「近代」を意味するものであり、西欧・日本の「近代」も究極的にはそこに流れこんでゆく。湖南はそのような世界史の未来を構想したと論じている。

とはいえ、中国共和制革命の前途は決して平坦なものではなかった。吉尾寛「内藤湖南の中国共和制論」は、『支那論』から『新支那論』に至る十年間に、湖南の中国論に変化が生じていることを論ずる。辛亥革命直後に湖南の期待した共和制国家の建設は、その後一向に進展しない。軍閥抗争の混沌たる政情もさることながら、国際関係にも大きな変化があった。第一次大戦後、国際秩序は英国中心から米国中心へと変化し、米国中心の資本主義経済が世界中に拡大した。これが日本の資本家をも巻きこんで、中国へ波及してゆく。こうした変化が、中国共和制を育成する環境を弱体化させた。この危機感が『新支那論』の底流にあるという。また『支那論』では、中国共和制達成の原動力を郷団の父老（長老）に求めたが、『新支那論』では農民の富裕化にこれを期待している。とすれば、この時期における湖南の共和制構想はかの毛沢東の農民革命思想とどう関わってくるかという問題を提起して、吉尾論文は文をしめくくっている。

『新支那論』で湖南が憂慮した日中関係は三〇年代に入って、「満州国」成立という事態に立ち至る。それに湖

南がどう対応したかは、日本の軍国主義と湖南との関係を考える上で避けることのできない問題である。山田伸吾「内藤湖南と満州帝国——橋樑の思想との比較を中心として」は、農村民主主義の夢を「満州国」に託して実践した橋（彼は湖南の批判者でもある）との比較において、このことを論じたものである。西欧の社会科学に拠り、情熱をもって理想世界の建設に身を挺した橋に対し、湖南はあくまで徹底した現実主義の立場を持ち、中国史発展の論理に沿って、「満州国」人の自治による「満州国」生成の道を構想した。ともに「満州国」を既成事実として認めたが、これを日本の傀儡国家たらしめようとする軍部に対しては批判的であって、彼らに単純に侵略主義のレッテルを貼ることは避けるべきであるという。湖南をはじめ「満州国」の共和政治を高く評価しながら、帝政に移行するやこれを支持する文章を発表しているが、山田論文はこれに対しても分析を加える。そしてもし湖南に問わるべき「責任」があるとするれば、それはその中国社会論ないし歴史論の普遍性と有効性にかかっているとす。

これは湖南の中国論を「政治主義」的にでなく、その基礎をなす学問の根底から問うてゆくべきだという提案であるが、その歴史論はいかに形成され、いかなる特質を具えるものであろうか。葭森健介「内藤湖南と京都文化史学」は、湖南の中国史の時代区分論が日本史の時代区分との密接な連関のもとに形づくられたことを述べ、それが内田銀蔵・原勝郎ら京都大学史学科の同僚教授たちとの相互影響を背景にしていることを指摘する。しかしそれと共に、青年期にはすでに後年の原形となるべきものが胚胎していたことを、『近世文学史論』（一八九七年）の分析によって明らかにする。このような独創と交流のなかでとくに関心が注がれたのは、日中双方の歴史における中世から近世への発展の問題である。京都学派および湖南は、それを文化史的手法によってとらえ、日本中国の歴史とともに発展の相において把握した。これは福沢諭吉や田口卯吉らの停滞論と対照をなしている。湖南によれば、非ヨーロッパ世界である日本や中国にも、それぞれの中世があり近世があった。その中世のメ

ルクマールは、葭森論文も指摘するように、貴族政治であった。中国では六朝・隋唐時代が中世貴族政治の時代に比定される。しかしその貴族とは、いかなる存在であったのか。福原啓郎「内藤湖南の中世貴族成立の論理」は、湖南退官後の講述記録「支那中古の文化」を綿密に分析しつつ、この課題に迫ったものである。福原論文は、この著作が貴族の成立根拠として学問・礼教というような文化のジャンルを重視していることに着目し、六朝貴族の原点を理解する上での大きな示唆としている。かえりみると、戦後の中国史研究は政治と社会に力点が置かれ、貴族制研究もその例外ではなかった。しかし事象のより内面的根元的な理解を旨とすれば、当然文化の役割に向かわざるを得ない。福原論文は、今日やや低調に陥っている貴族制研究の新たな発想をそこに求めている。

湖南の歴史叙述が政治・社会史を主としている場合も、当然存在する。しかしそれは、今日の政治・社会とらえ方と質を同じくするものであろうか。小林義廣「内藤湖南の中国近世論と人物論」は、戦後の社会経済史的研究がややもすれば経済的土台を第一義として上部構造をそれに帰属させる傾向を帯びて来たことに不満を表明し、人物によって時代の姿を照らし出す叙述法を、湖南の中に探ろうとするものである。したがって、ここにいる人物論とは、人格的な評価を目的とするものでは勿論ない。時代を体現する個々人の描写を通じて歴史を叙述することであって、そこに歴史と個人の内的な関わりが問われることになる。湖南はこうした観点に立って中国各時代の歴史的性格を浮き彫りにした。小林論文は、そのなかでもとくに「支那近世史」をテキストとして取り上げ、その人物描写がどのように近世論を構築しているかを分析している。

高木智見「内藤湖南の歴史認識とその背景」もまた、今日の歴史学には見出しがたい湖南の史学の特質を問題にするものである。中国の上古から現代に及ぶ広汎な関心、富永仲基や章学誠ら埋もれた天才学者たちを発掘する見識、そしてその歴史叙述の面白さ、これらは湖南のいかなる歴史認識から生まれたものか、こう問いつつ、とくに第三の叙述の面白さの秘密を探索する。高木論文によれば、それを可能にしたものは、象徴主義的な手法

で事物の個性をつかみ出すその鋭い感覚である。この指摘はさきの小林論文の論旨とも関わりあうところがあるが、その感覚は、事象を生成・変容・消滅という変化の相においてとらえる所に生じたもので、この認識方法の背景には、『史記』への傾倒と篤い仏教信仰があつたとする。

湖南の史学に影響したものに清朝の学問があるが、『支那史学史』『清朝史通論』等を通じて、清朝の史学に対する湖南自身の評価を跡づけたのが、馬彪『内藤史学』と清朝の史論『大勢論』についてである。「大勢論」とは、歴史を何らかの主観的な価値観で解釈するのではなく、人間社会それ自体の自然のなりゆきとしてとらえる考え方である。馬論文によれば、湖南は、このような歴史認識の発展を清朝の学問の中に見出し、それを次のように系譜づけた。すなわち、明の遺老顧炎武・黄宗羲・王夫之らの「時勢論」から、清朝前期の顧祖禹らの「沿革論」へ、さらには章学誠ら乾隆・嘉慶時代の「学問論」に至る史学の進化過程である。「時勢論」は時代の当面する課題を論ずるのに経学のような道德哲学を以てせず、歴史の大勢という客観的な見方を以てするものであり、「沿革論」は事象そのものを古今にわたる沿革の上で、つまり通史的に説明するもので、歴史的思考はさらに客観的叙述形式をとる。最後の「学問論」は、いわば史学そのものの学理を討究するものであつて、そこではこの地上の一切を歴史の所産だとする徹底した歴史主義が主張される。これらの三種は、事象を歴史の理勢からとらえる「大勢論」の発達径路を示すものであるが、歴史学の各ジャンルを表わすものでもある。湖南は清朝の史学をそのようにとらえ、それを自らの史論として全面的に開花させた。例えば『支那論』は正に一個の「時勢論」であり、『支那上古史』『支那近世史』などの通史は、個々の事象の沿革にとどまらず歴史発展の内部法則を考究する「沿革論」である。その「学問論」に至っては、叙上の清朝史学の真意義を発掘したことに如実に示されているであろう。馬論文はおよそ右の趣旨を展開しつつ、そこに、二十一世紀における歴史学のあり方への指針を求めている。

さて、このようにして古今中外に会通する湖南の史学の回路は、文化であつた。湖南における歴史は、つまりは文化の発展史であつた。大谷敏夫「湖南の中国文化論と政治論」は、このことに焦点を定めながら、その文化論の構図をたどり、それがいかなる形で政治論に結びつくかを、近代史の経過の中で述べたものである。湖南の文化概念が最後に到達した姿は、文明と文化の価値的な区別であつた。近代文明は工業の進歩をもつて国民の文化程度の標準とするが、湖南は文明から政治や経済を取り除いた、文芸・芸術などのいわば純粹な文化こそ、真に社会の進歩を表示すると考える。これは欧米の物質文明に追隨せず、中国独自の文化生活に価値を置くべきことの主張であり、またその育成保護に当たるのが国家の役割であるとする。ここから湖南の政治論が生まれてくるのであつて、彼の期待した中国共和制国家は、究極のところ人民主体の高度な文化生活が保証される世界であつた。大谷論文のこの趣旨は、さきの山田論文における「もう一つの近代」とも関わってくるであろう。

以上各論文の趣旨を正確に伝え得ているかどうかいささか不安が残るが、私たちの意図するところは、大要において理解していただけるかとおもう。私たちは決して湖南の説を無条件に信奉するものではない。その気宇広大な思想をできるだけありのままに捕捉し、それを私たち自身の学問形成に役立てたいと願うだけである。その際どうしても問題になってくるのは、湖南の時勢論が中国侵略を正当化する役割を果たしたとする戦後の論調である。それが一種のタブーを形づくって、湖南の思想の全体的説明を妨げることがなかったであろうか。こうして私たちは、このような通念に対しても、向き合わなければならなくなった。この点でも、先入見を捨てて、湖南の中国論の真意をありのままに汲み取る必要がある。その試みは各篇の随所においてなされているが、従来のいくつかの湖南批判のうち増淵龍夫のそれを検討したのが、拙稿「戦後の内藤湖南批判について——増淵龍夫の場合」である。増淵の湖南批判は、表層的な政治主義的批判を越えて、思想に即した内在的批判として最も高い評価と信頼を得てきた。しかしこれもまた戦後の革命礼賛の思潮に規定されて、湖南の思想の真実からかけ離れ

たものであるという結論に至ったのである。

本書は、現時点における私たちの到達点を示すものであるが、まだ湖南の思想の骨組みをデッサンしたに止まり、今後さらに考究を深めるべき問題が多々残されている。湖南の文章は一見無造作に感じられて、実は深く正確な論理で貫かれていることに気づかされるが、こうした点をも考慮しつつその思想山系の深みに分け入ってゆく必要があるであろう。最初の研究報告である本書には、所論の重複あり、解釈の相違あり、また多くの不十分さと誤謬を免れ得ていないとおもわれるが、読者諸氏の忌憚ない批評をおねがいする次第である。

二〇〇〇年十二月

谷川 道雄